

手記

シベリア抑留記

北海道 村上 嘉壽雄

振り返ってみると、この世に生を受けて、はや、いつの間にか八十歳を越え、長いようでもあり、短いようでもある。大正、昭和、平成と、この間に、日本の歴史は幾変転したが、結果から見れば、やはり進歩発展の道をたどったのである。

私は昭和十七（一九四二）年十月執行の徴兵検査に、軍医官より甲種合格、町より一人の衛生兵を言い渡され、昭和十八年一月歓呼の声に送られ、広島市に現役兵として集合、満州国内陸軍病院の要員として、約三百人、軍服他軍装品の支給を受

け、釜山、奉天（瀋陽）を経由大石橋の部隊に着。

四月中旬まで一期の教育（歩兵の教育）を終え、東安省斐徳陸軍病院に二十四人と共に配属され、地元部隊の隊付衛生兵と陸軍病院において九月中旬まで衛生兵教育を受け、陸軍病院各科へ配属、私は外科の勤務となり、主として手術室担当でした。各科には先輩衛生兵と赤十字看護婦、陸軍看護婦が勤務しており、色々と実地の指導を受けた。十九年四月長野県出身の初年兵二十人が配属され、昨年と同じく衛生兵教育を受け、九月各科に配属され、業務に従事した。

二十年一月より三月まで勃利陸軍病院において、特別補充衛生下士官教育に病院より二人の中に選

ばれ、教育を受け、六月陸軍衛生伍長に任官同陸軍病院付となり、外科病棟勤務に従事。

この時期、東満州地区の駐屯部隊は南方方面へ移動したため、また近隣部隊も牡丹江市付近へ指令を受け逐次移転して、我が陸軍病院も牡丹江市へ移転の指令を受け七月初旬入院患者と共に移動し、業務を再開していた。

八月九日未明、ソ連軍は、満州国の対ソ国境全域にわたり、関東軍への攻撃を開始し、空港、鉄道駅、橋梁、日本軍兵士の集団、日本軍防衛陣地の重要施設などが激しい空爆と低空射撃にさらされたため、このような猛攻の前には、関東軍は持ちこたえるすべもなく、まっしぐらに攻めてくるソ連軍を押しとどめる事も、侵攻を防いで主要戦力を救う事も不可能であり、ばらばらに分断された関東軍は多大の被害を被った。ソ連軍司令部の記録によると、第五軍だけでも戦の最初の数日で兵員の半数が死傷、火砲のほとんどを失った。満州作戦の最初の六日間でソ連軍は二百五十〜四百

キロも軍を進めた。軍の統制力を失った日本軍司令部は、どの方面をとっても頑強な抵抗を組織的にできるような状態ではなかった。

九日未明、非常呼集である「ソ連軍、満州に侵攻」の通達、入院患者を後方ハルピン方面に転送、牡丹江より北寄り、掖河に野戦病院を開設せよとの指令を受け直ち行動開始、入院患者八十人を牡丹江駅より列車にて看護婦、女子職員が護送し、ハルピンに向け送り出し、病院内では機密文書類等の焼却、院内の整理にて、朝から目の回るような忙しい一日であった。夜になると駅付近に山積されていた数々の軍用貨物などに火が付けられ、その不気味な光りで一晩じゅう昼間のごとく照らされていた。近くの弾薬庫にも火が付けられ、時々弾薬の炸裂の音を聞きながら、着の身着のままの姿で一夜を過ごし朝を迎えた。

十日午後、病院に石油を撒き放火したが、あまり燃えなかった。

野戦病院開設のため自動車八両に天幕、衛生材

料、機械、器具、薬品、食料等積み込み出発し、途中空爆を受けながら掖河において天幕を張り開設した。時折、爆撃機による爆撃を受けたが被害はなく、患者収容者はなし。

十三日朝、大きな木の下で各部隊の代表に命令伝達中爆撃を受け近くに大きな爆弾が落下し、これが最期と思ったが幸い泥炭地にて柔らかく不発弾で生き延びたこともあった。夜になり磨刀石付近において激戦あり患者発生しているので収容の指令受け、軍医と班長となり担架を携行し収容に向かったが、兵士達は少しは怪我をしたが一歩も下がらないと頑強に断られ、殺気立った気持ちに胸を打たれた。

十五日朝より爆撃が激しくなり、野戦病院勤務の衛生兵にも、敵戦車が近く迫っているので手榴弾五発が渡され、山麓に各自でタコツボを掘り、敵戦車に飛び込むよう指示され、タコツボの中で待機中爆撃、機銃掃射、迫撃砲弾の空中炸裂を受けながら時間の過ぎるのを待っていた。

夜になり、牡丹江の橋が爆破されるので、横道河子において野戦病院開設の指令を受け、直ちに自動車に分乗し、橋を無事渡り激しい爆撃、機銃掃射を受けながら目的地を目指す、一本道のため一般民間人、女子、子供で混雑し、昼間は激しい爆撃、機銃掃射のため死傷者が続出しても、手当てのする余裕もなく、自分の命を守る事しかできない状態が続いた。夕方になり病院関係者集合、一人の不明者あり探しに行くが、探す事はできなかった。負傷者も数人出たが軽傷で終わった。

十七日午後やつと横道河子に到着、先に野戦病院開設していた牡丹江陸軍病院に協力した。夕方きれいな小川付近で野営の準備していた時、「停戦協定が成立したので、明日ソ連戦車が入ってくるので白旗を掲げ迎え、抵抗してはならない」と命令が出された。

八月十八日終戦、武装解除

停戦協定成立と言うが、非公式には敗戦だろうと言われ、一時茫然となったが、とにかく皆と行

動を共にすることを約束した。空襲もなく堂々と炊事もでき、久しぶりに、美味しい御飯を食べる事ができた。

午後、武器はすべて指定された場所に出すように指示され、小銃、帯剣を出し帯革だけしめて、牡丹江に移動することになり、徒歩にて拉古の旧病馬廠に収容され、千人単位の大隊に編成されて、二十日間滞在した。

拉古編成十八大隊として、大隊長松本大尉以下千人は、九月十一日朝、ダモイのためウラジオストクに向け出発した。汽車は病人などで混雑しているのもので、元気な者は徒歩にてグロテコウまで行くとのこと。徒歩でも内地に帰れることならと、一同張り切って出発した。初日は牡丹江の官舎跡、翌日は代馬溝の道端だったが、途中激戦の跡には驚いた。戦車のキヤタピラや鉄兜が散乱していた。毎日、朝八時頃から夜は九時過ぎ暗くなるまで行軍したが、昼休みは二時間くらいあった。日本に帰りたい一心でよく歩いた。十五日夜、下城子で

一日休息で二泊、十九日綏陽を通過して山の中で野営、二十日国境の街綏芬河を通過。途中の草原にて野営して二十一日夜遅くグロテコウの街を過ぎ郊外の草原に野営した。二十三日、黒パンが支給され有蓋貨車に乗せられ出発、あと二三日でウラジオストクとみんな元気を増した。

時々止まる駅でソ連人にウラジオはどちらかと指差せば、進行方向を差すので喜んでいると、三日目になって列車の後方を差すので、初めてダメされた事に気づき一同ガックリ。夕方、山間の駅で下車をさせられ、紅葉も色あせたこの地区で以来二年半お世話になるとは、何たる因縁だろうか。昭和二十年九月二十七日、沿海州スーチャン地区チグロワヤ村にて、苦難の生活が始まったのである。

十八大隊のうち私たち四百人は、駅より四キロほど離れた場所に収容された。もともと囚人用の収容所であった建物で、一応の設備が、お粗末ながらあったので、あとあと大いに助かった。中は

二段式寝台、これまた丸太を並べるだけ、その上に二人で一枚の毛布を敷き、一枚は着る、着の身着のまま寝る。収容所は有刺鉄線で囲われ、入り口には警戒兵が常時立ち半年くらい厳しく警戒された。

厳しい労働を強いられながら、それを補う栄養は極度に乏しく、また粗悪であった。飢えてやせ衰えた体に極寒、重労働が重なってちよつとした事が死につながり、多くの人が亡くなった。当時のソ連の捕虜取扱い規則によると、一日、黒パン三百グラム、雑穀三百グラム、野菜六百グラム、油五グラム、獣肉五十グラム、塩十グラム、砂糖十五グラム、これなら結構な量である。

しかし実際に捕虜の手に渡ったのは桁違いに少ない。大方は二百グラムにも足りない黒パンが弁当、朝夕は雑炊で、うすいので箸の必要はなく、すするだけであった。特に生野菜の量が少なく、春になり野草やきのこを煮て食べた。これはソ連の管理者や糧秣受領者がピンはねしたり、地方人

に横流しされ、その残りが捕虜の食糧となったためである。一年後には次第に改善された。

伐採作業

収容されて三日目、作業班が編成され、二人挽きの鋸と斧とが二人に対し渡され、人員点呼後、ソ連兵の誘導で一キロくらい歩いた所の雑木林で、主に白樺、泥柳などを二メートルの薪材の伐採をさせられた。ズブの素人では大変な難作業であり、また二人挽きの鋸のため、対面する相手と呼吸を合わせることを知らないもので、このため鋸の動きが鈍くて、多くして効が少なく、体力の消耗が激しく、ノルマの達成が最初は到底無理な人も多かった。

ノルマは、長さ二メートルに切断し、高さ一メートル長さ四メートルに積み込んで、翌日民間人監督の検査を受けなければならなかった。ノルマの苦しさに耐えかね、監督員詰所での交渉の結果、半年後、鋸の目立てと斧の研ぎの要員を日本人の手で行うようになった。道具が仕事をする、

つまりノルマの向上には仕事の段取りと道具が必要な事をソ連人に理解させ、同時に鳶口とガンタ（木回し）を捨ててある車のスプリングを利用し鍛冶屋の経験者に造らせ、丸太の移動が簡単になり好評を得た。雪の中での伐採中、二人挽きのため、木の倒れる方向を見定め逃げ道は作っておいたが、木が途中で裂ける等により下敷きとなり、犠牲になった人も時々あり、いつになっても気の抜けない仕事であった。

このような状態の中で、一つ楽しく思えたのは、松の実を採る事ができたことだ。松は五葉の松で、木が高く五〜六メートル以上のものが多い。大きな松の実がついているのは、外径二十センチ以上の木で、実はとても美味しく、蛋白源として互いに喜び合ったものである。

十八大隊の本隊は、駅近くの収容所で、薪の貨車搭載や集材する自動車隊の整備などしていたが、一年後私達と交替も行われた。

薪の貨車搭載作業（十人一組）

丸太の積込み作業の中で貨車への積込みは、時間の制約があり、昼夜の区別が無い、貨車の入り次第で作業するので大変不規則な労働で、随分泣かされ、誠に重労働と思われた。

短尺材の輸送は有蓋貨車が使われる。入り口に丈夫な歩み板を架け渡し、大径材から順にこれまた人肩で運び込む。屋根付き貨車は大きく感じたが、車内の棚積みには、上手に空洞を作って実材積を少なく工夫するのが肝心だった。これが労働時間を左右するのだ、上手にソ連人監督の目をごまかす工夫をするのである。貨車の両側から重い丸太を下積みし車内に縦に並べ、車内の中央から木口が見えるように積む、中央部の入り口付近は横積みにするので最後まで残る。奥の方から天井まで隙間のないように詰め込む。積み込みの途中で巡回監督の目を上手に騙して空洞を作るのに創意工夫を凝らした事もあった。ここでも、鳶口と、ガンタの使用により、大きな丸太も簡単に動かす

事ができた。

チグロワヤ駅付近の沢には拉古編成十一大隊（大隊長梅田大尉）十二大隊（大隊長小林大尉）が薪材の伐採及び電柱材の伐採に従事していた。

民主運動について

二十二年秋頃より日本新聞の人が派遣されて来た。民主化が遅れていると指摘され労働運動が始まり、参加しなければダモイが遅れると思いい仕方無く参加した者がほとんどであった。

集結地ナホトカにおいて三日間、着いた日から民主化運動と言って赤旗の歌や労働歌を歌わされ、アクチーブにより民主教育を受けた。これも帰国の為には避けて通れない大きな関所であったと思う。

ぬくもり

二十一年秋になり、伐採の現場監督より依頼され、自宅の薪割りを二人で手伝った。家に着くなり、必ず、まず食べるとバターつきのジャガイモがたっぷり出される。作業後、帰りにも、さあ食

べろ。慢性的な空腹を少しでもいやす事ができた。ロシアの民間人とも付き合ったが、ロシア人は個人対個人では全く差別の無い扱いがなされ、ほっとした。

ナホトカ港

二十三年五月三十日突然帰国命令。ナホトカに到着、人員を確認され、テント村へ引率され、天幕生活での不安の日々を過ごす。毎日昼間は帰国に伴う身元調査、私物検査、散髪等が行われ、夜は共産主義教育、労働歌の練習を受け、覚えなければダモイはできないと、我々の弱点を突いてくる。

六月三日、雲一つない快晴、まさしく我々の気持ちのごとく晴れ晴れとした日だった。昼食後、広場に集められ、出発の号令を合図に、労働歌を歌いながら丘陵うらがわの埠頭を目指して歩いた。頂上まで来ると、眼下の埠頭の広場には整然と幾列にも並び、乗船を待っている姿が目についた。岸壁には祖国日本に運んでくれる復員船高砂丸が

煙突より白い煙をなびかせ、早く乗らないかと言いたげに横付けに停泊していた。最後の人員確認、総勢二千人位いただろう、一人ずつ名前を呼ばれ前へ進む、船のタラップを感無量に踏み締めてゆつくりと上がる。乗船後、船が公海上に出る。夕食は久しぶりに美味しい日本食を食べ、二年十月の抑留生活を振り返り眠りにつく。

六月五日朝、陸が見える。おお日本だ、樹木が、屋根が、白壁が見えるとの叫び。甲板に上がり、デッキの手すりにしがみついて、涙せぬ者はいない。美しい、それは祖国である。よかった、よく生きてきた。岸壁に人が並んでいる。

投錨と共にボートが船脇につき上陸した。

舞鶴

五年目に踏んだ日本の土、感無量である。上陸まず白い粉をかけられて消毒され（DDT）次が予防接種、事情調査が長かった。抑留中の経路、その土地での作業状況、食事の質量、収容所の組織、赤軍の様子、死亡した戦友の名前、あらゆる

調査が行われ、復員手続を終え、引揚寮の大きな風呂に入り、本当に生き返った気分になった。

三日目に新しい被服が支給され、引揚証明書、現金八百円を受け取り帰路についた。

こうして無事帰国できたのも、母は強い信仰者で、毎日、朝夕必ず私に対し入隊当時から帰国まで陰膳を供え祈り続けてくれたおかげと感謝している。

戦後五十九年あの大戦による多くの亡くなった戦友の事を思い、また異国の地にて名も無く散って行かれた友を思う時、二度と戦争はするものではないと痛感しているが、いつも世界のどこかで戦争が起きている。北海道よりイラクへ自衛隊員が派遣されてから、より戦争が身近に感じられる。何一つ罪のない、傷ついたイラクの子供たちの映像が流されるたびにいたたまれなくなる。もし、それが我が子だったら。戦争はあってはならない。でも、現実には世界中で戦争は絶えない。なぜ戦争が起きるのか、戦争を起ささないために今、私た

ちに何が考えられるだろう。戦争の惨禍、シベリア抑留の悲惨さを体験した事を後世に伝え、戦争のない平和な社会が訪れることを信じたい。多くの犠牲者に衷心より哀悼の誠を捧げ、ご冥福をお祈りいたします。

【執筆者の紹介】

現住所 札幌市白石区北郷

生年月日 大正十一年六月二十五日

父村上慶雄 母ツヤノ の次男

昭和十六年三月 音更町立青年学校卒業

入隊前の職業 家業の農業に従事

軍歴

昭和十八年 一月 満州国東安省 斐徳陸軍病院

衛生兵として入隊

教育を六カ月受け病院勤務

二十年 一月 勃利陸軍病院 特別衛生下士

官教育を三カ月受ける

六月 任陸軍衛生伍長

八月 横道河子にて終戦、武装解除

九月 沿海州スーチャン地区の収容所に抑留された。

チグロバヤにおいて伐採、貨車搭載、農作業、医務室勤務等に従事した

二十三年 六月 舞鶴港に上陸復員(高砂丸)

復員後の職業

二十三年 十月 浦河漁業協同組合診療所に勤務

二十四年十二月 同診療所は浦河赤十字病院

へ人事共に移管 事務部勤務

二十八年 八月 診療エックス線技師免許取得

得

四十四年 七月 社会保険労務士免許取得

五十八年 六月 浦河赤十字病院定年退職

五十九年 四月 札幌市産婦人科医会事務長

六十三年 三月 札幌市産婦人科医会退任
家族構成

二十五年 四月 妻佐々木芳江と結婚

三人の子供に恵まれそれぞれ独立している

執筆者は平成十一年六月に全抑協札幌支部に入会し、翌十二年四月役員改選の時に支部理事に就任した。慰藉事業の地方慰霊祭、展示会等の開催について積極的に参加協力されている。
現在も理事として活躍しております。

(北海道 森 英一)

異国の空に

シベリア抑留の記録

北海道 東島 房治

樺太逢坂捕虜収容所

逢坂の収容所には約一千人の兵士が収容された。収容所は日本軍の三角兵舎（地上は三角の屋根だけ出し、下は地下になっている簡易兵舎）が利用された。上級将校は別のところに収容されたらしく、我々と同じに収容されたのは見習士官で終戦時に少尉になった者と隊長として大尉が一人であった。

毎日収容所の整備が主な作業で労働らしい労働は無く過ぎていく。その時こっそりと倉庫を覗くと、樽に入った塩鮭があった。ロスケの塩鮭は塩水で樽漬けにするので色がとても奇麗である。早速一本失敬して腹に巻いて、知らない顔して作業をしていたが、段々と腹が冷えてきてこれには困